

# ブルーの背中を永遠に

西松 布咏

今年も最後の暦になったというのにまだ晩秋の小春日和が続いている。

お蔭で私は北園克衛の絶筆「ブルー」の最後のフレーズである「今去ってゆく秋のブルーの風のなかにいて・・・」の繰返ししなかにいた。

実相寺での二月公演に続き十一月二十六日、大阪・山本能楽堂での「貞女の夢・儂 文楽×江戸唄リミックス」公演を終えた。文楽の本場ゆえと私の芸の未熟さゆえか東の粋「いき」と西の粋「すい」の息がずれていたとの指摘を受けた。累々と時を重ねて確立されていった様式をリミックスしても原曲より良くなるはずはないし、義太夫の太棹に江戸唄の中棹が太刀打ちできないことは承知していた。

でも・・・人形の佇まいに潜む女心を女の声で表現してみたかった。特に八年前に馬場あき子氏の詞を創作邦楽として作曲した「橋姫」は、様々な共演者と繰返し「怨みながら恋しや」と心の奥底をえぐるように唄ってきたが、その想いを享受していただくにはこれからも永遠の時間が必要だろう。

大阪に続き岐阜の出稽古を終えて帰宅すると、ずしりと重い書籍が届いていた。

ジョン・ソルト氏の「北園克衛の詩と詩学——意味のタペストリーを裁断する」の翻訳本が二十五年もの年月を経てようやく完結したのだ。カルフォルニア大

学の恩師であったケネスレクスロスを通して北園克衛の存在を知り周囲の反対意見をものともせず、まったく面識のない日本の詩人をハーバード大学の博士論文のテーマに選び、爾来「世界的に評価されている北園さんを日本人が知らないのはおかしい！」と多大な労力をかけての研究に対する氏の情熱と私財を投じたレクシオンを掲載したページの重さに胸を熱くした。今年には長年に亘る熱心な交渉が実を結び、北園兄弟の生誕地である伊勢市朝熊にほど近い三重美術館と砧公園内の世田谷美術館の二箇所、「橋本平八と北園克衛展」も長期開催された。

黄金色の光がまぶしく溢れる十月二十四日。森に佇む世田谷美術館ホールでジョン・ソルト氏と翻訳者の田口哲也氏による講演会+パフォーマンスが開かれ、私は舞踏家の大野慶人氏と古典曲とシニールな言葉を三味線に乗せた創作曲で「北園克衛の世界」を共演した。ソルト氏は浅川マキや大野一雄・慶人を初めとする多くの日本人を世界に紹介したが、私が邦楽家としてアメリカ・ヨーロッパ公演へと活動を進展できたのも、当時氏が在籍していた北米のアムハースト大学で、私の公演を企画してくれたことがきっかけであった。

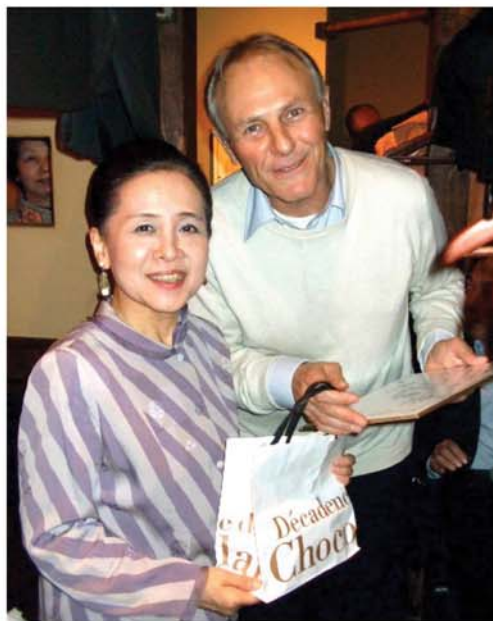
そして古典音楽の狭い籠の中でもがいていた私を見かねて斬新なデザインによるCDの制作を促してくれたり、三味線音楽も世界の音楽の一つなのだからもっと広い視野で考えたら？と現代詩を作曲することや他ジャンルのアーティスト達と交流してゆく「ニユアンスの会」を提案してくれた。

その模索のなかで、やがて北園克衛の「ブルー」や「黒い肖像」の曲が生まれ、生きてゆく心の叫びを三味線と共に世界や日本の各地で繰返し演奏することになってゆく。

ソルト氏は前衛であるとは歴史や従来の形式にとらわれない勇氣を持って行動出来るかどうかだと講演会

でも語っていたが、多岐に渉る北園克衛の研究も根底に源氏物語や西鶴文学といった古典への造詣の深さと理解があったからこそ、現代にその情熱を繋げて詩人・日本文学研究者としてさらに新しい表現世界の追求へと展開していったのだろう。

私にもさやかな夢がある。三味線音楽を現代人の心に響かせてゆきたいという・・・。



美紗の会は様々なジャンルで活躍している会員とこうした思いで楽しく稽古を続けているが、この秋は悲しい別れがあった。

「美紗の会のつどい」のたびに素晴らしい音響と映像のDVDを制作して下さり飄々とした穏やかで優しい人柄で慕われていた百瀬靖彦氏が十一月八日急逝された。十数年前に「商船三井の先輩から申し渡されたので・・・」と困惑した様子で入門され小唄の稽古を続けていたが、ある時 眼を真っ赤にして「病で亡くした娘の供養をしながら打ち込むものが欲しいので三味線を教えて下さい」と七十の手習いを始め、二人三脚でそれは大変な稽古を繰返した。この頃少し唄と三味線の間のずれが身に付いてきたかしら・・・という矢

先の訃報であった。長年の勤めをようやく終え、悠々自適の人生をどう唄って下さるだろうか・・・と私も楽しみにしていただけになんとも残念でならない。でも最愛のお嬢さんに天国で遭い、きつと得意気に三味線を聞かせているでしょう・・・とその背中を見つめ続けて行きたいと思っている。

ソルト氏は離日前の電話で「この展覧会が終わったら世界中の誰でもが、いつでも北園作品を観られるようにインターネット上で公開してゆくつもりです」と語っていた。

北園克衛の世界をこれからもっともつと拡げたい：ブルーの瞳の奥に今なお燃えるブルーの背中をもいつまでも見つめて行きたい。



## 黒い肖像

小野原 教子

東京がクライ。とよく人に話す。これまで好きになつた男が次々に日本国の中心であるその場所へ労働力として連れて行かれてしまふから。わたしは送り出す。

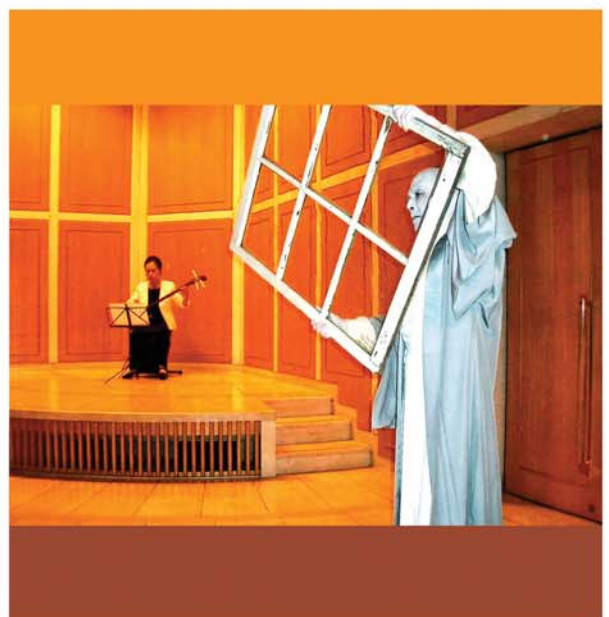
「東京弁ぜつたいしゃべつたらあかんで」。戻つてこない。待ちくたびれて、関西弁を捨てたかどうかを確かめることのないまま。そして。さようなら。

いい男は東京に持つていかれる。わたしはその頃京都に住んでいて、その人も京都に居た。わたしは自分のギターを渡した。わたしだと思つて毎晩抱えてくれとは言わないが、忙しくてギター弾くよね？と。古いクラシックギター。そのギターを渡した喫茶店ももうなくなつてしまつた。

新幹線のホームで見送る。発車間際に、男は唯一バッグに入れず首にかけていた大きなヘッドフォンを無造作に差し出した。耳にあたるクッション部分がすでに剥けて、音楽を聴くたびに黒いものがぼろぼろ落ちて、耳だけでなく服にもくつきそつだ。「いつまで何年間このヘッドフォンで聴いてたん？」いつまでもわたしはあなたの大切な音でありたい。

秋の世田谷美術館「橋本平八と北園克衛展」。わたしは言葉と衣服のアナロジーについて研究しているが、モダンズムを軽やかに着たり、ときには心地悪そうに脱いだふりをしながら、言葉という衣装を現代(わたし)に落として残してくれた北園克衛と人の大ファンであり、またその作品は研究対象でもある。といつても論文はまだ一本も完成していない。書きかけのものはあるのだけれど…。そんな心もとなない気持で東京へ行く。ひさしぶりだった。用賀で降りるのははじめだった。

西松布咏さんの北園克衛詩の演奏は、わたしは語らずとも定評があるに違いない。わたしには、演奏を聴く機会がある度に、まったくはじめて聴いた気になる。気というか体というか。何回聴いても飽きない。退屈にならない。おいでとは一言も言わないのに、両腕でわたしを招いている動作。一音はじまると一歩こちらに近づいて、ゆっくりと音の腕がすつと伸びて、進ん



で、すつぽりと包まれたら、脇目も振らずに、心もぶれずに。声の方へ。逃げられない。逃げたくない。できることならいつまでも。

田口哲也さんとジョンソルトさんの講演は、もつたないくらい充実した内容で、耳の聞こえない人のための手話解説が付いていた。その講演と演奏の前に、わたしは駆け足で展示を見たが、北園克衛の兄の橋本平八のうさぎの作品は印象的だった。なんだか大きさに違和感があつて。大きいとか小さいとかじゃない。奇妙なバランスでそこに居る。そんな感じ。そのうさぎ作品のオマージュも表現された大野慶人さんの舞踊は、決して大きくはないステージのなかで、どんどんふくらんでいく風船のような空間を作る。とても静かに。そして布咏さんの声と弦の作るエネルギーでどんな熱せられていく。音で内壁がなぞられる？ちがう。そこには壁がない。枠(フレーム)はあつてもそれは窓になつていて、つねに往来できて、揺れ動いている。自由に跳ねた。耳。

『黒い肖像』を演じる布咏さんは、ジミィ・ヘンドリックスみたかった。そんな風に書くと思われ、読者の方もおられるかもしれないが、わたしにはロックスターのように格好がよかった。色っぽいに男前で、しなやかなのに鋭利なミュージシャン。邦楽とか洋楽とか、ギターとか三味線とか、そういう物の名前を飛び越して、うらやましいくらい自由に、けれど力強い形から高いエネルギーがあふれていた。わたしは動かされる。動かされないまま。動けない。耳は音の熱でうごめいて、心はずっと揺さぶられつづける。展覧会の招待券を送ってくださった方がいたのに、郵便物はわけあって送り返されていて、受付で入場券を購入しようとしていると背の高い外国人の方がチケットをゆずってくださいました。前夜は慣れない東京の乗り物で乗るべき電車とは逆方向に乗ってしまった、終電に乗り遅れホテルまでタクシーを利用したが、運転手の方も道に迷って到着まで時間がかかったと言っていて、料金を請求されなかった。東京という都もまんざらでもないなあ。なにしろあんなにクールな音楽家がいる。絶望、火酒、紫、髭：『黒い肖像』の一行目から、夭折のギタリストはそこにいたのか。用賀で働いているはずのあなたは元気にしているだろうか。

## 月に憑かれて・魅せられて

高橋 枝里子

例年より長く感じられた夏の暑さもようやく収まり、暦の季節と気候が息を合わせ始めた十月はじめ。錦の秋と云うにはやや早い頃。高原と言えは夏の避暑地・冬のスキー場の印象が強く、さて初秋は……？と思いつつながら訪れた軽井沢は、爽やかな空気の中、多くの人々がゆつたりとした表情で時を過ごしている少しだけ日

常から離れた空間でした。

そんなちよつとした非日常空間・軽井沢で毎年行われ、今回で第三回を迎えるという「薊の会」。この春に入門したばかりの私にとっては初めて参加する会です。三味線と尺八、朗読のコラボを聴くのも初めての体験。事前に「とても雰囲気の良い所よ」と伺っていたこともあり、どのような所なのか、どのような空間であるのか……想像してとても楽しみにしていました。

会場の鶴間邸に着くと、森の香りに包まれた黒くモダンなデザインの別荘の中、広いリビングから続いている和室に和蠟燭が灯されステージになっていました。街の喧騒からは遥か遠く、辺りは秋の虫の声が聞こえるのみの静寂な気配の中で始まったプログラムは、「月に憑かれて・魅せられて」というお題。

夜空を照らす光と満ち欠けの神秘で、古来より人々を魅了し、多く芸術の題材となってきた月。その月に因んだ唄・曲・エッセイを、第一部は西松布咏師匠、尺八奏者の小林静純さん、そして俳優の寺田農さんがそれぞれお一人ずつ演奏・朗読されました。



荒野を渡る風のような、無常を感じさせる尺八の音色。時折冗談も交えつつ、楽しい雰囲気でも語られた天文エッセイ。そして師匠のしっとりとした唄と三味線。中でも歌沢の「お月さん」が、「闇の夜もあるぞえ」という詞が、人の心のことあらわしているように……「好き、と仰っていた師匠の解説の言葉とともに、印象に残りました。

休憩を挟んで第二部はお二方ずつのコラボ、「異ジャンルとの協演」。三味線と尺八、尺八と詩の朗読、唄と語りのコラボはそれぞれに異ジャンルという言葉の「異」の字が異なるほどに、絶妙に合わさっていました。そして演奏会終了後の場で、今回初めて、師匠の演奏を聞かれた方とお話していた時に伺った『演奏している時は圧倒的な存在感で、とても大きく感じられて……今立っていらつしやる小柄な姿とは、まるで別人のようでした』という感想に、思わず同感です！……と。舞台の上の師匠は、とても大きい存在で、今まで邦楽にあまり触れてこなかった自分のようなものにも、「凄い！」と感じさせる力がある。その事を再確認致しました。

演奏中も、その後の会の間も残念ながら曇りで、月の姿を確認することはできませんでしたが、その後の会の中の余興で、秋の夜風にくるくる回って満ち欠けする紙のお月様のお月見をすることができました。本物の月の光こそ目にできませんでしたが、月は太陽の光を受けて輝くだけでなく、それ自身が引力を持って私たちの住まう地球と引き合っているそうです。

その見えない力で、海の潮の満ち引き、更には人間の体内の水や精神にまで影響を与えているとか。眼に見えなくとも強い引力をもって人に影響を与えるのは、芸の力も同じかもしれません。

天空の月は見えずとも……地上の月に魅せられた一日でした。

